

グローバルな不安、宗教学と宗教教育

マイケル・パイ

大谷大学講演

(第1回 2005年2月22日、第2回 2005年3月8日)

要旨

グローバルな見方をするならば、宗教の多様性や、諸々の宗教が世界の様々な場所で隣り合って存在していることが見て取られる。様々なメディアにおいては、宗教は社会的に重要なものであると同時に政治的に危険なものと見なされている。

それにもなつて、宗教学 (study of religions) は国際的でグローバルな活動として発展を遂げてきた。国際宗教史学会 (International Association for the History of Religions; IAHR) は重要な役割を果たしており、また、ヨーロッパ宗教学会 (European Association for the Study of Religions; EASR) などの多くの学会もまた同様である。3月には東京で日本宗教学会が IAHR の第19回世界大会を開催する (第1回大会は1900年に開催)。

歴史的には、多くの大学が、キリスト教や仏教、イスラームなどの宗教的な基盤をもった団体として設立された。一方、宗教学はなんらかの宗教的な基盤に依拠しない、宗教的に中立な学問の手法として発展してきた。

それでもやはり、宗教学の専門家は社会的・政治的に重要な問題　たとえば、宗教と衝突・戦争との関係など　を説明し解説する責任を負っている。宗教に関する5つの重大な事柄は次のように分類されよう：

- 1．単純な世俗化のプロセスは存在しない
- 2．宗教が持つ強いイデオロギー的機能
- 3．非合理性と暴力への恐れ
- 4．宗教と国家を分離することが困難
- 5．宗教教育は問題が多い

第2講で詳解しているように、これらは全て相互に関係している。

宗教の言葉を用いる際の様々なレベルを区別することが必要である：

- ・ 信者の用語法 (内部者の用語法) : 「神の言葉に頼りきる」という意味の原理主義
- ・ メディアの用語法 (外部者の用語法) : 「狂信主義」という意味の原理主義
- ・ 学問的な用語法 (外部者の用語法) : 「厳密実直な直解主義」という意味の原理主義

様々な理由から、信者や関係者は宗教学の専門家が述べる意見に満足しないかもしれない。これが「信者との対立(緊張)関係のファクター(Tension With Believer Factor, TWB Factor)」につながる。それと同時に、宗教学の重要な手がかりとなる原則は、感情移入(empathy)と距離をおくこと(detachment)である。これら二つは結びつけられなければならない。さらに言えば、宗教学とは「立場」ではなく、むしろプロセスであり、他の学問的手順に類似したものである。(図を参照)

しかし、宗教学は宗教に関係する人々と常に緊張関係にあるとは限らないし、その関係のあり方は緊張関係だけということもなく、非常に良い関係にあることもある。このことは、研究のプロセスにおいてだけでなく、対話をとりなす際においても大切である。例として、近年の浄土真宗(大谷大学)と福音主義神学(マールブルク大学)の代表者による対話や、「宗教のハーモニー：問題、実践、教育」についてのIAHRのインドネシアにおける地域会議(2004年)が挙げられる。(出版物を参照)

「戦争と平和」という問題に関しては、どのような宗教の伝統にも、好戦的なものから平和的なものまで変動する多様な傾向があるということを理解することが重要である。実際、信仰を持つ人々の間では、彼らの信仰と伝統が含み持つ意味についての議論が行われている。これは神学者たちそれぞれにとっての問題であるが、しかしまた同時に、宗教学の専門家は可能な選択肢を解説する努力をするべきである。それゆえ、観察者による分析の観点において、次の特徴づけの意味が簡潔に探求されるだろう。

- ・ キリスト教：戦闘的な選択肢は中心的なものではない
- ・ イスラーム：頑なな防御的スタンスが典型的である
- ・ 仏教：平和的姿勢が期待されている
- ・ シーク教：平和主義から頑なな防御的選択肢への展開
- ・ ヒンドゥー教：戦闘的な行為には無関心
- ・ ユダヤ教：征服 - 受難 - 征服の弁証法
- ・ 神道：国家主義的だが、必ずしも軍国主義的ではない

「宗教教育」の問題は、社会の衝突、暴力、国家間の戦争に対抗するための意味を持つゆえに重要である。

しかし、私的な教育と公的な教育の関係という問題は注意深く考察されねばならない。私的な宗教教育は偏りがある可能性がある。公的な宗教教育はイデオロギー的な誤用や、宗教と国家を分離する原則を否定することになるかも知れず、これは逆に信教の自由を失うことにつながりかねない。

宗教教育と宗教的に中立なプロセスとしての宗教学とを相互に関連させることがこれらの問題の解決になる。またそのような宗教学は、教育学的な点において子供の成長と発達とも関係していく必要がある。次の4つの段階がこの結び付きの基本的な方向性を示している。

- ・ 意識する：習俗や祭儀を学ぶ
- ・ 理解する：宗教的なテーマを学ぶ
- ・ 知る：より広い世界の中で宗教を学ぶ
- ・ 分析と省察：宗教の問題について学ぶ

提案

以上のことから次の提案が為される。日本の宗教教育の新しいプログラムは、教育の見地、特に子供の発達の見地から、一つの宗教的な見方を主張することをしないで、世界的視野の宗教学と結び付くべきである。このように展開することで、宗教と国家の分離を守りながら、国際的に受け容れられる興味深いモデルがもたらされるだろう。

結論

グローバルな規模で言うならば、宗教の伝統と体系は、様々な危機をもたらし、様々な社会の衝突や国家間の戦争につながるものであると考えられている。しかし一方でそれらは、人間の生活と社会にとって重要な様々な価値と意味を供するものとも考えられている。若い人々が宗教のもつ様々な意味を適切に理解することが出来るようになるためにも、社会的・学問的責任において、私たちは私的領域、公的領域の両方において宗教教育の適切なプログラムを創り出す必要がある。そして将来の平和と調和のためにもこのことは不可欠なのである。

マイケル・パイ
大谷大学 2005年3月